

献帝の礼制と皇帝権

——董卓誅滅から許昌遷都まで——

上 條 駿

はじめに

後漢の礼制について、すでに様々な視点からの考察があるが、その中で主要な問題とされるのは、王朝支配における儒家的理念の存在である。これは、以降王朝支配の基層になるものとして重要視されている。^①とりわけ、献帝期は漢から魏への交替期でもあり、その結果なされた漢魏禅譲を、南北朝期における王朝交替の指針として位置付ける研究もある。その中では、主として祭天儀礼や即位儀礼の問題が盛んに論じられている。^②しかし、魏への禅譲をおこなった献帝は、周知の通り、董卓による少帝弁の廃位を受けて即位したという経緯を持つ。これに対しては袁紹らが反発し、山東の反乱など、^③献帝の皇帝権を揺るがす事象が頻発する。いわば、後漢王朝の支配そのものが危機的状況にあったものとみられるのであるが、こうした中で、献帝による禅譲が魏の成立をいかにして担保し得たか、という問題は、漢魏禅譲の前提を考える上で重要なものであると考えられる。

本稿では、こうした問題意識から、董卓誅滅から許昌遷都までの混乱期における献帝の祭祀、儀礼に着目する。そして、当該期の政治状況の中で、献帝の礼制と皇帝権とがいかにして存続し、漢魏禅譲の前提として機能し得たか、

ということを考える指標としたい。

一、董卓誅滅後の長安

董卓が初平三年に誅滅されると、司徒王允が録尚書事となり、朝政を握った。王允は、董卓の専権が終結したことを誇示するかのように張种を派遣し、山東を撫順している。^④しかし、同年五月には、董卓の将であった李傕、郭汜が反乱を起し、六月には長安が陥落する。そして、六月甲子に、朝政を掌握していた王允が殺害される。^⑤七月庚子になると、太尉馬日磾を太傅、録尚書事とし、太僕趙岐とともに再度天下を撫順させる。^⑥この時は、洛陽を経由して関東に向かい、趙岐が袁紹、曹操らと会見している。また、派遣先の郡県からはこれが好意的に受け取られていたようである。^⑦趙岐はさらに南下して陳留に到達した時点で病にかかったが、馬日磾は山東を経由してさらに南下し、興平元年までには、寿春に到達したことが確認できる。^⑧反乱が起こつた山東から、寿春にまでも到達したこの撫順がおこなわれたことは、董卓期の混乱状態とは対照的である。こうした経過の中、献帝による祭祀、儀礼にも変化がみられる。まず、『後漢書』献帝紀・初平四年冬十月条に、

（初平四年）冬十月、太学行礼、車駕幸永福城門、臨觀其儀、賜博士以下各有差。

とある。初平四年冬十月に太学で儀礼をおこない、献帝が自らこれに臨んだ。後漢における太学の儀礼には、光武帝による經学講論と養老礼とがあつたことを確認できる。前者の儀礼は、魏晋期以降の釋奠儀礼との関連も指摘されているが、皇帝臨席による經学講論の場合は明帝期に辟雍へと移っているため、^⑨献帝期の事例が經学講論に当たるものとすることは難しい。後者の養老にしても、博士以下への下賜があつたというが、後漢には養老に付随して博士らにどのような措置が取られた事例を見出すことはできない。したがって、初平四年の太学での儀礼を、後漢代を通してお

こなわれてきた既存の儀礼に比定することはできない。

しかし、『後漢書』献帝紀・初平四年九月甲午条に、

九月甲午、試儒生四十余人、上第賜位郎中、次太子舍人、下第者罷之。詔曰、孔子歎、学之不講、不講則所識日忘。今耆儒年踰六十、去離本土、宮求糧資、不得專業。結童入学、白首空歸、長委農野、永絕榮望、朕甚愍焉。其依科罷者、聽為太子舍人。

とあり、太学の儒生四十余人を試験し、上位者を郎中、太子舍人に、下位者を罷免としたことを伝える。太学生の実験は唯一靈帝期にも確認できる⁽¹⁰⁾。その動機は判然としないが、献帝期におこなわれた試験もこれを踏襲したものと考えられる。靈帝期のもとの異なる点は、この時献帝が詔を発し、罷免されるはずであった下位者に対して、太子舍人に取り立てる、という措置がとられたことである。詔にもあるように、後漢末において、太学生が官途に就くことは難しく、多くが高齢となつてから、郷里に帰つて郡吏となるにとどまつていた。また、李賢注には、

劉艾献帝紀曰、時長安中為之謠曰、頭白皓然、食不充糧、裹衣蹇裳、当還故郷、聖王愍念悉用補郎舍、是布衣被服玄黃。

とあり、献帝の救済策を称える謡言が流行つたことを伝える。実際に長安でこの謡言が謡われたか否かは別としても、太学生境遇と、献帝の措置がそうした境遇への救済策として機能し得たであろうことはうかがえよう。この翌月におこなわれた太学の儀礼では、献帝自らがその儀に臨んだだけでなく、博士以下に下賜もおこなわれた。困窮していた太学生の側からすれば、献帝の恩徳を、儀礼を通して再確認することにつながつたであろう。また、献帝の側からしても、自らの恩徳を誇示し、太学生を太子舍人として自らの周囲に置くことで、独自の官僚集団を構築し得た。李傕、郭汜の乱による混乱が徐々に収束しつつある中で、太学生任用と太学の儀礼とが、献帝独自の官僚集団を形成する一連の施策として機能していたものと考えられるのである。

年が明けると、献帝が元服し、興平への改元がなされた。この際、『後漢書』献帝紀・興平元年条に、

興平元年春正月辛酉、大赦天下、改元興平。甲子、帝加元服。二月壬午、追尊諡皇妣王氏為靈懷皇后、甲申、改葬于文昭陵。丁亥、帝耕于藉田。

とあるように、改元と元服の翌月、献帝の実母である王美人への追尊と文昭陵への改葬、そして籍田礼がおこなわれる。王美人への追尊と改葬は、『後漢書』皇后紀下・王美人紀に、

興平元年、帝加元服。有司奏立長秋宮。詔曰、朕稟受不弘、遭值禍乱、未能紹先、以光故典。皇母前薨、未卜宅兆、礼章有關、中心如結。三歲之感、蓋不言吉、且須其後。於是有司乃奏追尊王美人為靈懷皇后、改葬文昭陵、儀比敬、恭二陵、使光祿大夫持節行司空事奉璽綬、斌与河南尹駱業復土。

とあるように、献帝の詔を受けた有司の上奏により、敬陵、恭陵の故事と同様の礼でおこなわれた。⁽¹⁾ 文昭陵にはすでに何皇后が合葬されていたが、上記の二陵と同様、実母を先帝の陵に合葬したものとみられる。二陵の故事にみられる実母への尊号と改葬について、実母の地位向上と、それに伴う嫡母の相対的な地位の低下とが指摘されており、⁽²⁾ 王美人の場合についても、同様の性格が想定し得る。他方、王美人は何皇后に毒殺されたという経緯を持つ。⁽³⁾ 霊帝はこれに激怒し、何皇后を廃后しようとしたが、宦官がこれを止めたために、沙汰止みとなった。⁽⁴⁾ 宦官が誅滅され、董卓が献帝を擁立すると、董卓は何皇后を毒殺する。⁽⁵⁾ しかし、その董卓も、何皇后を廃することはせず、王美人への追尊の議も起こすことはなかった。このうち何皇后は董卓に毒殺されるが、文昭陵に合葬される。そこで献帝は、興平への改元と元服を期に、王美人への追尊と改葬をおこなうことで、実母の地位向上を図ったものと考えられる。また、これに先立つて献帝は王美人の兄王斌とその妻子を長安に召喚した。すなわち、『後漢書』皇后紀下・王美人紀に、

帝求母王美人兄斌、斌将妻子詣長安、賜第宅田業、拜奉車都尉。

とあるのがそれである。この際、王斌には田宅が与えられたほか、奉車都尉に任じられた。奉車都尉は、天子の御乘輿車を掌るが、霍光、竇固など外戚が多く任じられた官職でもあった。⁽⁶⁾ 王斌は王美人改葬の際にも、河南尹駱業とともに改葬の任に当たっている。このうち、王斌は執金吾に遷り、都亭侯に封じられた。⁽⁷⁾ 本来、王美人は霊帝の嫡妻で

はなく、その兄である王斌も、この段階まで外戚としての扱いを受けることはなかったものとみられる。しかし、董卓誅滅後の献帝は、祭祀の上で王美人を皇后として追尊しただけでなく、王斌に対しても、外戚に準じた待遇を与えたことになる。そこには、実母とその一族の地位を向上させ、皇帝―外戚といった権力構造を構築しようとする意図がある。

董卓誅滅後の長安では、李傕、郭汜による王允殺害という混乱はみられたものの、山東への撫順をおこなうことで、董卓期以来の混乱を收拾する、という意図がある。これと平行するかたちで、霊帝と献帝との直接的な継承関係を強調しつつ、董卓期よりもさらに踏み込んだ、献帝独自の権力構造の構築が、祭祀、儀礼を通しておこなわれた。一方で、こうした一連の施策が、政治の主導権を握ったとみられる李傕らの立場とはどのように関連したのか、という問題が残る。そこで、次章では当該期における彼らの祭祀観に着目し、検討していく。

二、李傕の祭祀観

李傕、郭汜らは、董卓の娘婿であった中郎将牛輔の命令を受け、張済とともに陳留、潁川の諸県で略奪をおこなっていた。董卓が誅滅されると、呂布が李肅を派遣して陝に駐屯していた牛輔を攻撃させる。この際、牛輔は李肅を弘農に退けたが、直後に牛輔の陣営が恐慌状態に陥り、牛輔は側近の支胡赤児に討たれた。⁽¹⁸⁾ 李傕、郭汜らは残った兵十余万をまとめ上げて長安を攻撃し、陥落させる。その後の経過は前章で述べた通りである。そして、董卓を郿に葬ったのち、初平三年九月に李傕が車騎將軍、司隸校尉に任じられたほか、郭汜が後將軍に任じられている。⁽¹⁹⁾ また、李傕、郭汜と行動を共にしていた張済は驃騎將軍に任じられた。これ以降も、李傕らは將軍位にはあり続けたが、公卿には一貫して皇甫嵩や楊彪などの儒家官僚が充てられた。自らが相国にまで就き、帝位の篡奪を企図した董卓とは対照的

である。一方で、李傕が政治を壟断していた状況も確認できる。

『三国志』 魏書卷六・董卓伝の裴注には、

献帝紀曰、是時新遷都、宮人多亡衣服、帝欲發御府繒以与之、李傕弗欲、曰、宮中有衣、胡為復作邪。詔虎賁馬百余匹、御府大司農出雜繒二万匹、与所壳殿馬直、賜公卿以下及貧民不能自存者。李傕曰、我邸閣儲殿少、乃悉載置其宮。賈詡曰、此上意、不可拒、傕不從之。

とあり、経済状況が董卓期同様窮乏した状況にあるなか、李傕が宮中の財政に介入していた。そのほか、『後漢書』朱儁伝には、

及董卓被誅、傕、汜作乱、雋時猶在中牟。陶謙以雋名臣、数有戰功、可委以大事、乃与諸豪桀共推雋為太師、因移檄牧伯、同討李傕等、奉迎天子。乃奏記於雋曰、…、国家既遭董卓、重以李傕、郭汜之禍、幼主劫執、忠良殘敝、長安隔絕、不知吉凶。是以臨官尹人、搢紳有識、莫不憂懼、以為自非明哲雄霸之士、曷能剋濟禍乱。…、雋曰、以君召臣、義不俟駕、況天子詔乎。且傕、汜小豎、樊稠庸兒、無他遠略、又執力相敵、變難必作。吾乘其間、大事可濟。遂辭謙議而就傕徵、復為太僕、謙等遂罷。

とある。中牟に滞在していた朱儁に対して、徐州刺史陶謙ら在地の豪族が、朱儁に送った檄文である。この中では、李傕、郭汜の乱によつて、長安が隔絶されている、という。前述のような広範囲に渡る撫順がおこなわれていることや、これが檄文であるという点を考えれば、実際の状況をそのまま伝えたものとは考え難い。しかしすくなくとも、李傕らによる専権が一部では批判的に捉えられていたことは確認できよう。したがって、董卓のような篡奪への志向は確認できないものの、李傕、郭汜の専権が董卓期と同様のかたちで継続していたものと考えられる。

このように、李傕らは將軍という立場を保持しつつ、政治に介入していた。ところが、李傕個人は祭祀に関して、『三国志』 魏書卷六・董卓伝の裴注に、

献帝起居注曰、傕性喜鬼怪左道之術、常有道人及女巫歌謳擊鼓下神、祠祭六丁、符効厭勝之具、無所不為。又於

朝廷省門外、為董卓作神坐、數以牛羊祠之、訖、過省閣間起居、求入見。

とあり、老莊思想を好んでいたことが分かる。また、省中の門外で董卓の神座を祭り、それが終わると献帝の起居を問う、というのが李傕独自の祭祀的習慣となっていたようである。董卓の神座を祭っていたことに關しては、董卓を鄴に葬った李傕からすれば当然のことと考えられていたのであろう。しかし、こうした儀礼が、国家祭祀の場にまで持ち込まれた様子はいかがえないため、少なくともこの時点では、あくまで李傕個人によるものであったものと考えられる。

他方、前引の裴注には、

天子以謁者僕射皇甫酈涼州旧姓、有專对之才、遣令和傕、汜。酈先詣汜、汜受詔命。詣傕、傕不肯、曰、我有討呂布之功、輔政四年、三輔清静、天下所知也。郭多、盜馬虜耳、何敢乃欲与吾等邪。必欲誅之。君為涼州人、觀吾方略士衆、足弁多不。多又劫質公卿、所為如是、而君苟欲利郭多、李傕有膽自知之。

ともあり、李傕は自らを「有討呂布之功、輔政四年、三輔清静、天下所知也。」と評価している。前述の通り、李傕と郭汜は、董卓期の中郎将であった牛輔の指揮下にあったものと考えられる。董卓が呂布によって誅滅され、牛輔も殺されたのち、李傕らは混乱した幕僚をまとめ上げ、長安を陥落させた。そのため、李傕からすれば、呂布を長安から駆逐したことは、董卓の持っていた兵権を継承し、逆賊である呂布を討った「功績」として捉えられたのであろう。そして、董卓に代わって朝政を輔弼するということが、李傕の基本的な姿勢であったものと考えられる。いわば李傕の立場はあくまで董卓による献帝輔弼の延長線上にあり、献帝の皇帝権そのものを否定するには至らなかったのである。これに加え、李傕自身は董卓と比較して儒家的祭祀に対する理解が薄く、老莊思想に基づいた独自の祭祀をおこなってはいたものの、献帝がおこなう国家祭祀に介入することはなかった。これは、このうち李傕が大司馬に任じられてからも同様であったものとみられる。むしろ、李傕の関心は、郭汜、張濟らとの主導権争いに終始していたようであるが、それについては後述する。

以上のように、李傕は政治的な主導権を握っていたとみられるものの、献帝の祭祀、儀礼に介入した様子はみられない。李傕の政治的立場はあくまで董卓による献帝輔弼の延長線上に位置しており、献帝の皇帝権そのものを否定することはできなかった。また、李傕には老莊思想を核とした独自の祭祀観があり、儒家的祭祀への理解そのものが不足していた可能性を見出せる。すなわち、祭祀、儀礼を通じた献帝による皇帝権構築は、李傕の専権とは競合することが無かった。しかし、その一方では李傕、郭汜をはじめ、旧董卓幕僚間での主導権争いも進行していた。そこで次に、そうした主導権争いと、それにともなう献帝の東遷以降、祭祀と皇帝権とがいかにして維持されたか、という問題について、章を改めて検討する。

三、献帝の東遷と許昌遷都

興平二年二月乙亥になると、李傕と郭汜とが、政治の主導権を巡って戦闘状態に入る。⁽²⁰⁾この際、宮室が焼かれ、李傕の陣営に献帝が連れ出される事態にまで発展するが、六月庚午に両者は和解する。⁽²¹⁾そして、献帝の東遷が計画された。これは、李傕と郭汜の調停にあたった張済が、献帝を自らの陣営である弘農に遷そうとしたことによる。一方、献帝は洛陽帰還を希望していたようで、両者の思惑にやや齟齬がみられるものの、この計画は李傕の承認を得る。⁽²²⁾当初は郭汜、楊定、楊奉、董承が献帝を護衛するが、新豊から華陰に向かう途中で郭汜が裏切り、献帝を脅して郿を都としようとした。⁽²³⁾しかし、残った楊奉らが護衛をし、李傕、郭汜らとの戦闘を繰り返しながら、同年十二月庚辰までに、華陰、東澗、曹陽、陝と、黄河の南側に沿って東へと進んでいった。この間、東澗では献帝側が大敗し、光禄勳鄧泉、衛尉士孫瑞ら公卿が多数戦死する事態に見舞われる。⁽²⁴⁾これに次ぐ曹陽の戦闘では、楊奉、董承の呼びかけに応じ、白波賊の胡才、李樂、韓暹および左賢王去卑らが献帝に協力し、一度は李傕らの軍を破った。⁽²⁵⁾楊奉は元白波賊の

頭目でもあったため、韓暹らが楊奉の呼びかけに応じたのであろう。

陝に到達すると、献帝たちは洛陽へ進まず、黄河を渡って河東郡の安邑へと向かう。この経路変更は、『三国志』魏書卷六・董卓伝に、

奉、(韓)暹等遂以天子都安邑、御乘牛車。

とあるように、楊奉、韓暹の主導によるものであった。この際の渡河については、弘農郡出身の太尉楊彪や、陳令を経験していた劉艾が反対している。実際に、李傕らの追手をかわしながらの渡河は困難をきわめ、渡り切ったのは楊奉らも含めたわずか数十人であった。⁽²⁶⁾このような危険を冒してまで安邑に向かった背景としては、安邑が河東郡の郡治であり、同郡を拠点としていた楊奉らの影響のもとで、黄河を要害とし、李傕らを防ぐという、戦略上の目的があったことがうかがえる。実際に、献帝は安邑に到達したのち太僕韓融を弘農に派遣し、李傕、郭汜らと和睦している。⁽²⁷⁾また、安邑に着くと河東太守王邑が綿帛を献上したため、これを列侯に封じたほか、曹陽で救援に駆けつけた胡才などに將軍位が与えられた。⁽²⁸⁾この際、楊奉、董承には封爵などはおこなわれなかったが、『三国志』魏書卷六・董卓伝には「並与奉、承持政」とあり、二人が政治の主導権を握っていたことがうかがえる。このようにして、安邑を仮の都とする体制ができてつづいたものと考えられる。

年が明けると、『後漢書』献帝紀・建安元年春正月癸酉条に、

建安元年春正月癸酉、郊祀上帝於安邑、大赦天下、改元建安。

とあるように、上帝の郊祀、建安への改元がおこなわれた。献帝が安邑を仮の都としたことの側面として、楊奉らが李傕の追手を防ぐための、戦略上の目的が挙げられる。一方で、そもそも李傕と楊奉との争いは、長安における李傕と郭汜との主導権争いを発端としている。この際、いずれも献帝の身柄を自らの陣営に置き、郭汜はさらに鄆を都としようとした。前章で検討したように、李傕の専権は献帝輔弼を前提としたものであり、その主導権を握るためには、献帝を自らのもとに置くことが必須条件であったとみられる。そのため、李傕と郭汜との主導権争いは、献帝の

身柄を巡る争いに発展した。楊奉らの拠点である安邑で郊祀をおこなったことは、こうした主導権争いの結果、献帝の身柄が楊奉のもとに置かれたことを示すことになった。

他方、献帝は漢の伝統的な都である長安、洛陽のいずれからも離れることになる。しかし、郊祀が本来天子の居所でおこなわれるべき祭祀であることを考えれば、安邑での郊祀は、祭祀の本来的な性格への回帰とも理解できよう。無論、それは献帝が唯一無二の天子であることを前提とする。そのため、献帝を輔弼する楊奉らはもちろん、事態の経過を観察する他の群雄にとつても、安邑での郊祀をいかにして認識するかということが、献帝を後漢の天子として認識するか否かの分岐点ともなり得たのではなかったか。こうした考察に大過がなければ、献帝は自らを巡って董卓の旧幕僚が争いを繰り広げる中、自らの健在と天子としての威光を、郊祀を通して誇示し、献帝を後漢の天子として奉ずるか否かの選択を、天下に対して突きつけたことになる。

ところが、実態として安邑における献帝の境遇は、天子にふさわしいものとは言えなかった。というのも、蝗害が起こり、穀物の収獲が見込めなかったからである。諸将や民衆の統率も乱れはじめたため、楊奉、韓暹、董承は、河内太守張楊の進言に従って、洛陽に帰還することを決定した。献帝ら一行は六月乙未に聞喜に幸じたのち、箕閔、軹道を経由して七月甲子に洛陽に到着した。⁽²⁸⁾この時献帝は、『後漢書』献帝紀・建安元年条に、

夏六月乙未、幸聞喜。秋七月甲子、車駕至洛陽、幸故中常侍趙忠宅。丁丑、郊祀上帝、大赦天下。己卯、謁太廟。
八月辛丑、幸南宮楊安殿。

とあるように、洛陽でも郊祀をおこなう。献帝の洛陽帰還を示すためのものであろう。こののち、八月癸卯には張楊が大司馬、韓暹が將軍、楊奉が車騎將軍に叙された。⁽²⁹⁾ここにきて張楊が大司馬となったことは、洛陽への帰還を進言したこと、その道中で食糧を供出したことによるものである。楊奉らが依然として政治に関与する中で、張楊が大司馬にまで引き上げられるという歪みが生じ始めたのである。

ただし、張楊が食料を供出した以外は周辺の州郡から救援が来ることはなく、そのため洛陽での状況も安邑と変化

がみられなかったようである。こうした状況下で、曹操が献帝の保護に動き始める。そして、曹操が本拠を置いたばかりの許昌に都を遷すことが提案された。遷都はあらかじめ計画されていたわけではなく、当初は楊奉と曹操とが洛陽において共同で献帝を輔弼する思惑であったことがうかがえる。楊奉もこれを承認したようで、曹操は鎮東將軍に叙せられたほか、費亭侯に封じられた⁽³⁰⁾。しかし、楊奉は許昌遷都には反対し、曹操との戦闘の末、敗北する。こうして、献帝の周囲から楊奉、韓暹ら河東の勢力が排除され、建安元年八月庚申、曹操の庇護下での許昌遷都がおこなわれる⁽³¹⁾。遷都以降、『三國志』魏書卷一・武帝紀に、

自天子西遷、朝廷日乱、至是宗廟社稷制度始立。

とあるように、長安以来、朝廷の混乱のために途絶えていた宗廟社稷の制度が整えられたという。その具体的状況は判然としないが、長安、安邑、洛陽での窮乏した状況から考えれば、郊祀も含めて、それぞれの祭祀が通常通りおこなわれていたとは考え難い。許昌という安定した都を得て、そうした祭祀が本来の形に整備されはじめたものとみるべきであろう。

李傕と郭汜との間の主導権争いは、献帝の身柄を巡る争いに発展する。長安における政治の主導権が、献帝を輔弼する、ということ的前提にしていたからであろう。両者が和睦すると、張済の提案によって献帝の東遷が始まる。しかし、これも張済が、自らの陣営に献帝を引き入れるための方便であった。これを契機として、献帝を巡る争いは楊奉や董承など他の旧幕僚、さらには白波賊の韓暹までも巻き込み、広域化していった。こうした中で献帝が郊祀をおこない、自らの居所と後漢の都を明確化させたことは、そうした争いの結果献帝の身柄が誰の元に帰したか、ということを明らかにすることにもなった。同時に、それは漢の伝統的な都だけにとどまらず、天子の居所こそが都である、という觀念を打ち出したことになる。安邑での郊祀は、そうした意味において、後漢の礼制上における画期でもあった。ただし、献帝にとって安邑はあくまでも仮の都であり、最終的に洛陽への帰還が果たされると、再度郊祀をおこなうことで、洛陽帰還を顕示した。これと同時に、洛陽帰還を進言した張楊が加わるかたちで、主導権争いが再燃す

ることとなる。最終的にはこの争いに曹操が加わり、楊奉らを排除して献帝を許昌に迎える。以降、宗廟社稷の制度が整備されはじめ、曹操の輔弼と許昌という安定した都の中で、礼制の再建が開始された。董卓誅滅以来、祭祀と儀礼とが、不安定であつた献帝の皇帝権を担保していたが、許昌遷都以降はそれを前提として、後漢本来の礼制を再建することが課題となったものとみられる。

おわりに

李傕、郭汜の専権期において、献帝は太学での儀礼と王美人への追尊をおこなう。これらは、献帝独自の官僚集団の形成と、実母の地位向上にともなう、皇帝—外戚という権力構造への回帰とを目的としていた可能性を指摘した。献帝は祭祀を通して、即位以来不安定であつた皇帝権の強化を志向したものと考えられる。この方向性は董卓期にもみられたものであるが、献帝の施策は祭祀、儀礼を通してそれを独自に継続、発展させたものといえよう。

こうした中、李傕は政治に介入することはありつつも、祭祀に介入していた様子はみられない。李傕には独自の祭祀観があり、儒家的な祭祀への理解が薄かったものとみられる。また、李傕の権力は董卓による献帝輔弼の延長線上にあり、献帝の皇帝権そのものを否定することができなかった。それらの理由から、祭祀を媒介として独自の権力構築を企図する献帝に対して、李傕は直接的な介入をすることがなかったものと考えられる。

しかし、このうち李傕、郭汜による主導権争いが起こり、献帝の身柄を巡る争いに発展する。争いは董卓の旧幕僚全体に広がり、献帝の東遷がおこなわれることで、地域的にも広域化することになる。こうした中、安邑において郊祀がおこなわれたことは、同地を根拠地としていた楊奉、韓暹らのもとに献帝が置かれ、争いが一旦は収束したことを示すことになる。他方、これによって、漢の都は伝統的な長安、洛陽のみにとどまるものではなく、天子の居所こ

そが都である、ということを示すことにもなった。ただし、献帝にとつて安邑はあくまで仮の都でしかない。そのため、洛陽への遷都がおこなわれると、献帝は再度郊祀をおこなうことで、洛陽帰還を顕示した。このうち、張楊や曹操が介入するかたちで主導権争いが再燃すると、曹操の提案により許昌遷都が実行され、曹操の輔弼と許昌という安定した都を得たことで、礼制の再建が図られた。

以上、董卓誅滅から許昌遷都までの礼制と皇帝権を巡る動向について、基礎的な検討を試みた。その中で明らかとなったのは、一面では献帝の皇帝権を担保するものであった董卓が誅滅された後、献帝自身がいかにして独自の権力を構築するか、ということが、当該期における課題であつたということである。こうした課題に直面する中で、祭祀、儀礼の挙行を通して、霊帝との直接的な継承関係と、太学生や実母の外戚を引き込んだ権力構造とが形成されたものと考えられる。これは、当該期の混乱状態の中である程度その目的を達成したものとみられる。このうち、曹操が献帝を許昌に迎えた段階で、礼制の再建が新たな課題となってくるのである。この様にして見た場合、当該期の混乱の中で、献帝が礼制を通して独自の皇帝権を模索し、それが一定の成果を収めたことで、漢魏禪譲の基盤が作り上げられたものと考えられるのであるが、詳細な検討は今後の課題としたい。

註

- (1) 主な研究として、西嶋定生「皇帝支配の成立」(『岩波講座世界歴史』岩波書店、一九七〇)、板野長八『古代中国における人間観の展開』(岩波書店、一九七二)、金子修一『古代中国と皇帝祭祀』(汲古書院、二〇〇一)、『中国古代皇帝祭祀の研究』(岩波書店、二〇〇六)、渡辺信一郎『天下観念と中国における古典的国制の成立』(『中国の歴史世界―統合のシステムと多元的發展―』東京都立大学出版会、二〇〇二所収)、渡邊義浩『後漢国家の支配と儒教』(雄山閣、一九九五)などが挙げられる。

- (2) 即位儀礼については、尾形勇「皇帝の自称形式と即位儀礼―王朝交替時のばあいを中心に―」(『山梨大学教育學

部研究報告・第一分冊』人文社会科学系二八、一九七七、のち、同氏『中国古代の「家」と国家―皇帝支配下の秩序構造―』岩波書店、一九七九所収。）、「中国の即位儀礼」（『東アジア世界における日本古代史講座第九巻 東アジアにおける儀礼と国家』学生社、一九八二）、西嶋定生「漢代における即位儀礼」（『榎博士還暦記念東洋史論叢』山川出版社、一九七五）渡邊義浩「漢魏における皇帝即位と天子即位」（『東洋研究』一六五、二〇〇七、のち、同氏注（１）前掲書所収。）参照。祭天については、郊祀との関連とともに論じられており、小島毅「郊祀制度の変遷」（『東洋文化研究所紀要』一〇八、一九八九）妹尾達彦「帝国の宇宙論―中華帝国の祭天儀礼―」（『王権のコスモロジー』弘文堂、一九九八）、目黒杏子「後漢郊祀制と「元始故事」」（『九州大学東洋史論集』三六、二〇〇八）金子氏『古代中国と皇帝祭祀』（汲古書院、二〇〇一）、『中国古代皇帝祭祀の研究』（岩波書店、二〇〇六）などが挙げられる。

(3) 石井仁「漢末州牧考」（『秋大史学』三八、一九九二）、また、拙稿「蔡邕の廟制改革と董卓」（『鴨台史学』）に投稿、二〇一八）では、献帝の即位を不当とする山東の反乱に対して、董卓専権下の長安では元号や廟制の改変などを通して、霊帝と献帝との直接的な継承関係を、献帝即位の正当性として利用していたことを指摘した。

(4) 『後漢書』献帝紀・初平三年夏四月辛巳条
夏四月辛巳、誅董卓、夷三族。司徒王允録尚書事、総朝政、遣使者張种撫慰山東。

(5) 『後漢書』献帝紀・初平三年五月条
董卓部曲将李傕、郭汜、樊稠、張濟等反、攻京師。六月戊午、陷長安城、太常种拂、太僕魯旭、大鴻臚周奐、城門校尉崔烈、越騎校尉王頌並戰歿、吏民死者万余人。李傕等並自為將軍。

『後漢書』献帝紀・初平三年六月条

李傕殺司隸校尉黄琬、甲子、殺司徒王允、皆滅其族。丙子、前將軍趙謙為司徒。

(6) 『後漢書』献帝紀・初平三年秋七月庚子条

秋七月庚子、太尉馬日磾為太傅、錄尚書事。八月、遣日磾及太僕趙岐、持節慰撫天下。車騎將軍皇甫嵩為太尉。司徒趙謙罷。

(7) 『後漢書』趙岐伝

及獻帝西都、復拜議郎、稍遷太僕。及李傕專政、使太傅馬日磾撫慰天下、以岐為副。日磾行至洛陽、表別遣岐宣揚國命、所到郡県、百姓皆喜曰、今日乃復見使者車騎。

(8) 『後漢書』趙岐伝

是時袁紹、曹操与公孫瓚爭冀州、紹及操聞岐至、皆自將兵數百里奉迎、岐深陳天子恩德、宜罷兵安人之道、又移書公孫瓚、為言利害。紹等各引兵去、皆与岐期会洛陽、奉迎車駕。岐南到陳留、得篤疾、經涉二年、期者遂不至。同書孔融伝

初、太傅馬日磾奉使山東、及至淮南、数有意於袁術。術輕侮之、遂奪取其節、求去又不聽、因欲逼為軍帥。日磾深自恨、遂嘔血而斃。及喪還、朝廷議欲加礼。融乃独議曰、日磾以上公之尊、秉髦節之使、銜命直指、寧輯東夏、而曲媚姦臣、為所牽率、章表署用、輒使首名、附下罔上、姦以事君。昔国佐当晋軍而不撓、宜僚臨白刃而正色。王室大臣、豈得以見脅為辭。又袁術僭逆、非一朝一夕、日磾隨從、周旋歷歲。漢律与罪人交関三日已上、皆心知情。春秋魯叔孫得臣卒、以不發揚襄仲之罪、貶不書曰。鄭人討幽公之乱、斲子家之棺。聖上哀矜旧臣、未忍追案、不宜加礼。朝廷從之。

(9) 保科季子「漢代における經学講論と国家儀礼——釋奠礼の成立に向けて——」(『東洋史研究』七四・四、二〇一六) 参照。

(10) 『後漢書』靈帝期熹平五年十二月条

十二月甘陵王定墓試太学生年六十以上百余人、除郎中、太子舍人至王家郎、郡国文学史。

(11) 二陵の故事については、『後漢書』祭祀志下に、

明帝臨終遺詔、遵儉無起寢廟、藏主於世祖廟更衣。孝章即位、不敢違、以更衣有小別、上尊号曰顯宗廟、間祠於更衣、四時合祭於世祖廟。語在章紀。章帝臨崩、遺詔無起寢廟、廟如先帝故事。和帝即位不敢違、上尊号曰肅宗。後帝承尊、皆藏主于世祖廟、積多無別、是後顯宗但為陵寢之号。永元中、和帝追尊其母梁貴人曰恭懷皇后、陵。以竇后配食章帝、恭懷后別就陵寢祭之。和帝崩、上尊号曰穆宗。殤帝生三百余日而崩、鄧太后攝政、以尚嬰孫、故不列于廟、就陵寢祭之而已。安帝以清河孝王子即位、建光元年、追尊其祖母宋貴人曰敬隱后、陵曰敬北陵。亦就陵寢祭、太常領如西陵。追尊父清河孝王曰孝德皇、母曰孝德后、清河嗣王奉祭而已。安帝以讒害大臣、廢太子、及崩、無上宗之奏。後以自建武以來無毀者、故遂常祭、因以其陵号称恭宗。順帝即位、追尊其母曰恭愍后、陵曰恭北陵。就陵寢祭、如敬北陵。順帝崩、上尊号曰敬宗。沖質帝皆小崩、梁太后攝政、以殤帝故事、就陵寢祭。凡祠廟訖、三公分祭之。桓帝以河間孝王孫蠡吾侯即位、亦追尊祖考、王国奉祀。語在章和八王伝。帝崩、上尊号曰威宗、無嗣。靈帝以河間孝王曾孫解犢侯即位、亦追尊祖考。語在章和八王伝。靈帝時、京都四時所祭高廟五主、世祖廟七主、少帝三陵、追尊后三陵、凡牲用十八太牢、皆有副俸。故高廟三主親毀之後、亦但殷祭之歲奉祠。靈帝崩、獻帝即位。初平中、相国董卓、左中郎將蔡邕等以和帝以下、功德無殊、而有過差、不応為宗、及余非宗者追尊三后、皆奏毀之。四時所祭、高廟一祖二宗、及近帝四、凡七帝。

とあり、和帝が実母である梁貴人を恭懷皇后、安帝が実祖母の宋貴人を敬隱后、順帝が実母を恭愍后と追尊し、それぞれ先帝に合葬した。ただし、都合三人の追尊后が確認できるのであり、敬、恭二陵というのが具体的にいづれを指すのかは判然としない。

(12) 『後漢書』皇后紀下・靈思何皇后紀

中平六年、帝崩、皇子弁即位、尊后為皇太后。太后臨朝。后兄大將軍進欲誅宦官、反為所害、舞陽君亦為乱兵所殺。并州牧董卓被徵、將兵入洛陽、陵虐朝廷、遂廢少帝為弘農王而立協、是為獻帝。扶弘農王下殿、北面称臣。太后顰涕、群臣含悲、莫敢言。董卓又議太后踰迫永樂宮、至令憂死、逆婦姑之礼、乃遷於永安宮、因進酖、弑而崩。在位十

年。董卓令帝出奉常亭举哀、公卿皆白衣会、不成丧也。合葬文昭陵。

(13) 保科季子「天子のお述…漢代の儒教的皇后論」(『東洋史研究』六一・一二・二〇〇二) 参照。

(14) 『後漢書』皇后紀下・靈思何皇后紀光和三年条

光和三年、立為皇后。明年、追号后父真為車騎將軍、舞陽宣德侯、因封后母興為舞陽君。時王美人任娠、畏后、乃服藥欲除之、而胎安不動、又数夢負日而行。四年、生皇子協、后遂酖殺美人。帝大怒、欲廢后、諸宦官固請得止。董太后自養協、号曰董侯。

(15) 註(12)前掲史料参照。

(16) 『後漢書』百官志

奉車都尉、比二千石。本注曰、無員。掌御乘輿車。

同書明帝紀永平十五年十二月条

十二月、遣奉車都尉竇固、駙馬都尉耿秉屯涼州。

『漢書』卷六・武帝紀・光元元年夏六月条

夏六月、御史大夫商丘成有罪自殺。侍中僕射莽何羅与弟重合侯通謀反、侍中駙馬都尉金日磾、奉車都尉霍光、騎都尉上官桀討之。

(17) 『後漢書』皇后紀下靈思何皇后紀

斌還、遷執金吾、封都亭侯、食邑五百戶。病卒、贈前將軍印綬、謁者監護喪事。長子端襲爵。

(18) 『後漢書』董卓伝

初、卓以牛輔子婿、素所親信、使以兵屯陝。輔分遣其校尉李傕、郭汜、張濟将步騎数万、擊破河南尹朱雋於中牟。因掠陳留、潁川諸県、殺略男女、所過無復遺類。呂布乃使李肅以詔命至陝討輔等、輔等逆与肅戰、肅敗走弘農、布誅殺之。其後牛輔宮中無故大驚、輔懼、乃齎金宝踰城走。左右利其貨、斬輔、送首長安。

- (19) 『後漢書』 献帝紀・初平三年九月条

九月、李傕自為車騎將軍、郭汜後將軍、樊稠右將軍、張濟鎮東將軍。濟出屯弘農。

- (20) 『後漢書』 献帝紀・興平二年二月乙亥条

二月乙亥、李傕殺樊稠而与郭汜相攻。三月丙寅、李傕脅帝幸其營、焚宮室。

- (21) 『後漢書』 献帝紀・興平二年夏四月丁酉条

(四月) 丁酉、郭汜攻李傕、矢及御前。是日、李傕移帝幸北塢。

同書 献帝紀・興平二年五月壬午条

五月壬午、李傕自為大司馬。六月庚午、張濟自陝來和傕、汜。

- (22) 『後漢書』 董卓伝

張濟自陝來和解二人、仍欲還帝權幸弘農。帝亦思旧京、因遣使敦請傕求東歸、十反乃許。

- (23) 『三国志』 魏書卷六・董卓伝

郭汜復欲脅天子還都鄠。天子奔奉營、奉擊汜、破之。汜走南山、奉及將軍董承以天子還洛陽。傕、汜悔遣天子、復相与和、追及天子於弘農之曹陽。奉急招河東故白波帥韓暹、胡才、李樂等合、与傕、汜大戰。奉兵敗、傕等縱兵殺公卿百官、略宮人入弘農。天子走陝、北渡河、失輜重、步行、唯皇后貴人從、至大陽、止人家屋中。奉、暹等遂以天子都安邑、御乘牛車。太尉楊彪、太僕韓融近臣從者十余人。以暹為征東、才為征西、樂征北將軍、并与奉、承持政。遣融至弘農与傕、汜等連和、還所略宮人公卿百官、及乘輿車馬數乘。是時蝗蟲起、歲旱無穀、從官食棗菜。諸將不能相率、上下乱、糧食盡。奉、暹、承乃以天子還洛陽。出箕關、下軹道、張楊以食迎道路、扞大司馬。語在楊伝。天子入洛陽、宮室燒盡、街陌荒蕪、百官披荆棘、依丘牆間。州郡各擁兵自為、莫有至者。饑窮稍甚、尚書郎以下自出樵采、或饑死牆壁間。

- (24) 『後漢書』 献帝紀・興平二年十一月庚午条

十一月庚午、李傕、郭汜等追乘輿、戰於東澗、王師敗績、殺光祿勳鄧泉、衛尉士孫瑞、廷尉宣播、大長秋苗祀、步兵校尉魏桀、侍中朱展、射声校尉沮雋。

(25) 『三國志』魏書卷六・董卓伝注引『献帝紀』

献帝紀曰、初、議者欲令天子浮河東下、太尉楊彪曰、臣弘農人、從此已東有三十六灘、非万乘所當從也。劉艾曰、臣前為陝令、知其危險、有師猶有傾覆、況今無師、太尉謀是也。乃止。及当北渡、使李樂具船。天子步行趨河岸、岸高不得下、董承等謀欲以馬羈相統以繫帝腰。時中宮僕伏德扶中宮、一手持十匹絹、乃取德絹連統為輦。行軍校尉尚弘多力、令弘居前負帝、乃得下登船。其余不得渡者甚衆、復遣船收諸不得渡者、皆爭攀船、船上人以刃櫟斷其指、舟中之指可掬。

(26) 『三國志』魏書卷六・董卓伝

奉、暹等遂以天子都安邑、御乘牛車。太尉楊彪、太僕韓融近臣從者十余人。以暹為征東、才為征西、樂征北將軍、並与奉、承持政。遣融至弘農与傕、汜等連和、還所略宮人公卿百官、及乘輿車馬數乘。

(27) 『後漢書』董卓伝

河東太守王邑奉献綿帛、悉賦公卿以下。封邑為列侯、拜胡才征東將軍、張楊為安國將軍、皆假節、開府。

(28) 『後漢書』董卓伝

初、帝入関、三輔戸口尚数十万、自傕汜相攻、天子東歸後、長安城空四十余日、強者四散、羸者相食、二三年間、関中無復人跡。建安元年春、諸將爭權、韓暹遂攻董承、承奔張楊、楊乃使承先繕修洛宮。七月、帝還至洛陽、幸楊安殿。張楊以為己功、故因以楊名殿。乃謂諸將曰、天子当与天下共之、朝廷自有公卿大臣、楊当出扞外難、何事京師。遂還野王。楊奉亦出屯梁。乃以張楊為大司馬、楊奉為車騎將軍、韓暹為大將軍、領司隸校尉、皆假節鉞。暹与董承並留宿衛。

(29) 『後漢書』献帝紀建安元年八月癸卯条

癸卯、安国將軍張楊為大司馬、韓暹為將軍、楊奉為車騎將軍。

(30) 『三國志』魏書卷十四・董昭伝

建安元年、太祖定黄巾于許、遣使詣河東。会天子還洛陽、韓暹、楊奉、董承及楊各違戾不和。昭以奉兵馬最強而少党援、作太祖書与奉曰、吾与將軍聞名慕義、便推赤心。今將軍拔万乘之艱難、反之旧都、翼佐之功、超世無疇、何其休哉。方今群凶猾夏、四海未寧、神器至重、事在維輔、必須衆賢以清王軌、誠非一人所能独建。心腹四支、実相恃頼、一物不備、則有闕焉。將軍當為内主、吾為外援。今吾有糧、將軍有兵、有無相通、足以相濟、死生契闊、相与共之。奉得書喜悅、語諸將軍曰、兗州諸軍近在許耳、有兵有糧、国家所当依仰也。遂共表太祖為鎮東將軍、襲父爵費亭侯、昭遷符節令。

(31) 『後漢書』献帝紀・建安元年夏六月庚申条

庚申、遷都許。己巳、幸曹操宮。